

名作再読、拾い読み (20)

『ガラスの動物園』 ("The glass menagerie") (2)

小澤 文彦

ストーリーはトムスのナレーションで始まり、追想の中で、トムがセント・ルイスの狭苦しいアパートで母親のアマンダ、姉のローラと一緒に暮らしていた時代へと遡ります。

外出していたアマンダが厳しい顔付きで帰宅し、ガラス細工のコレクションを磨いていたローラに問いただすことから話が急展開します。ローラはビジネス・スクールヘタイプライターを習いに行っていた筈なのですが、非常に内向的な性格のため、初日に吐き気を催してから欠席し続けていて、母親にそのことをずっと隠していたのでした。怒りが収まってから、アマンダはこのままではローラが職も見付けられず、不幸なオールドミスになってしまうことを心配して、誰か結婚相手になるような男の友達を連れて来るようにトムに頼みます。

トムは、食べ方から読む本にまでいちいち干渉してくるアマンダの口うるささに辟易して、家を出ることを考えていました。アマンダとは些細なことでよく口喧嘩をしていましたが、ローラの結婚相手を探すことには同意し、同じ職場にいるジム・オコーナーを食事に誘います。ジムはハイスクール時代にローラが陰ながら恋心を抱いた唯一の男性でした。ローラは心の準備ができていないままに突然、その日の訪問客がジムだと知らされ、玄関で挨拶した直後に緊張のあまり倒れてしまい、一緒に食事ができません。

食事が終わった頃、電気料金未納のために停電になりました。ジムはローソクの灯りの中で、隣室のソファに横たわっているローラに近づいて話しかけます。彼の優しい言葉に、ローラの心は次第にほぐれていきました。ハイスクール時代のことを話し合っているうちに、ジムは声楽のクラスでローラと一緒にだったこと、彼女を "Blue Roses" (ブルーローズズ=青いバラ) というニックネームで呼んでいたこと、そしてその由来は、彼女が "pleurosis" (ブルーロウシス=胸膜炎) で休んだと言ったのを "Blue Roses" と聞き間違えたからだったということも思い出します。

彼はハイスクール時代、活発な行動をする輝かしいヒーローでした。学校で一番おしゃれな女の子と付き合っていて、将来はホワイトハウス入りするだろうと期待されていたのです。と

ころが、卒業後は挫折して倉庫勤めの身分。そこから抜け出すために夜学に通い、出世・昇進を真剣に考えている現実主義者でした。

彼は自分も劣等感に悩まされていたことがあるので、ローラが劣等感に悩まされていることに直ぐに気付いたと言います。足に障害があることを気にしているローラに、人間として自信を持つようにと励まし、踊れないと思いつんであるローラを巧みにリードして一緒にワルツを踊ります。踊っているうちにテーブルにぶつかり、そこに置かれていたユニコーンが倒れ、角が折れてしまいました。ユニコーンはローラが一番気に入っていたガラス細工でした。この時、ジムはローラの美しさに心打たれ、思わず額にキスをしてしまいます。彼女は幸福感に酔い痴れますが、彼は自分の行為を謝り、実はベティという女性と近々結婚する予定だということ打ち明けます。幸福の絶頂から一瞬にして絶望の淵へ投げ出されたローラは、それでも気を取り直して、記念にと言いながら角の取れたユニコーンをジムに手渡すのでした。

ジムが帰った後、アマンダはトムを非難し、口論となった勢いで、トムは家から飛び出しました。その後、ナレーションからトムが船員になって旅を続けていることが知らされます。

一緒に居れば息苦しく感じられる家族も、離れてみて初めて家族の絆の大切さが理解されます。それでも、内面的には矢張りそれぞれが孤独な存在だということを訴えているのかも知れません。壊れやすいガラス細工のような美しさを持ったローラが、厳しい現実に滅ぼされていく、そしてそれを防ぎようが無いもどかしさと悲しみ、そういったものが胸に迫ってくる作品です。

参考文献

1. Tennessee Williams "The glass menagerie" in "Four plays" (Secker & Warburg, 1968)
2. T・ウィリアムズ著、小田島雄志訳『ガラスの動物園』(新潮社、2011)

おざわ ふみひこ (情報サービス課)